闇市の発生と整理からみる新宿駅近傍の形成過程

-都市組織の動態分析-

明治大学 石榑 督和

宮音

研究背景

戦後東京の鉄道ターミナル駅を中心とする都市形成を考える事は、終戦直後の闇市の発生と、その整理過程を考える事であると言っても過言ではない。本研究は新宿を対象とし、その過程を捉えるものである。

東京の都市史研究の蓄積はきわめて厚く、(1)下町の歴史的市街地や(2)郊外住宅地において多くの研究が展開されている。そして、(1)では近世から近代への土地や空間構造の強固な連続性に、(2)では社会的・経済的・空間的な計画性と均質性に、それぞれ根拠を置く事で明瞭な研究方法を組上げてきた。それに対し、新宿あるいは渋谷、池袋などの副都心エリアの都市は一見無秩序と言えるほどの激しい新陳代謝と景観変容に特徴づけられた、きわめて流動的な都市である。これまでの都市史研究の方法ではその性格を捉える事は困難であろう。

本研究は、終戦から新宿駅近傍の戦災復興土地区画整理事業が 完了する1970年前後を対象とし、闇市の発生と整理の過程において、建物や土地がどのように動き、都市組織を再組織化してい くのかを観察するものである。この期間を観察対象とするのは、 短期間で新宿がもっとも激しく変容した期間であり、またそれ故 に現在の新宿をなす基盤となった時期であるからだ。

研究目的

本研究の目的は以下のように設定する。

- ①新宿駅近傍におけるマーケットの発生過程を明らかにし、それ ぞれのマーケットを周辺を含めた都市組織として位置づける。
- ②新宿駅近傍における闇市の整理過程で変換されている物理的な 条件を明らかにする。
- ③新宿駅東口における区画整理を契機としたマーケットの変容を 都市組織レベルで捉え、その動きを明らかにする。

既往研究との関係と研究方法

新宿の闇市についての既往研究は松平誠氏の一連の闇市研究がある。松平氏は闇市を祭りや聖域などの非日常的な空間で、敗戦直後から1950年前後の約5年間に現れては消えていったまちとして捉え、東京の主要な闇市を概観している。また、ヤミ市調査団の研究は展示用の模型制作を目的とし、対象地である新宿東口の闇市を建築的に把握している。両研究ともに対象がマーケットに限られ、1950年以降の整理過程で闇市がどのように変容していったかについては記述していない。

初田香成『戦後日本における都市再開発の形成と展開に関する 史的研究』(東京大学学位論文,2008) はマーケットの整理過程 に注目し、多くの事例を分析する中で戦後の駅前都市開発の一端 を鮮明に描き出している。また、マーケットにおける土地や建物 の関係についても議論しており、本研究に最も近い視点を有する 研究である。しかし、初田氏の視点は広く東京全域におよぶもの であるが故に、マーケットの位置についてはマクロに観察し、周 辺を含む都市組織の観点で捉える意識が薄い。

本研究の対象とする都市組織は現存しないため、何らかの方法で、対象とする期間のいくつかの時点においての都市組織を復元し、それを比較、分析する必要がある。その点では、災害後の都市において、都市組織の動きを克明にとらえた田中傑『帝都復興と生活空間 関東大震災後の市街地形成の論理』(東京大学出版会、2006年)の方法論は極めて有用である。田中氏は、震災復興のケーススタディにおいて、地図、写真、地籍図、地籍台帳、換地設計図などを用いて、震災前とバラック市街地、区画整理後の市街地の土地と建物の関係、店舗の業種、所有の関係などをそれぞれの時点において驚異的な解像度で明らかにしている。

本研究は主に以上の研究を参考に、文献や図面の収集を行い、 基本的情報を把握した上で、火災保険特殊地図と換地完了図、航 空写真をもとに都市組織の動態を明らかにする。

第1章-戦前の新宿駅とその近傍

1-1 昭和戦前期のでの新宿駅近傍の変遷と新宿駅のターミナル 化(省略)

1-2 戦災前夜の新宿

戦前の新宿東口は、マクロに見れば小粒で勾配屋根を持った建物の集合体のなかに、高層でフットプリントの大きな百貨店や映画館が点在している街並であった。昭和13年の火災保険特殊地図によれば、東口の対象地域に建つ建物の総数は430棟で、鉄筋コンクリート造の建物は、百貨店の三越と二幸、銀行二棟、小売店の高野と中村屋、飲食店の聚楽とキリンビアホール、新宿ホテル、映画館の武蔵野館と新宿第一劇場のみである。

新宿駅西口では、戦前の時点で大蔵省東京専売局淀橋工場と淀橋浄水場の移転計画を背景とした「新宿駅付近広場及街路計画」が都市計画事業決定し(1934年4月18日決定)、昭和16年4月に竣工している。また同時期に、広場北側に隣接した角筈第一土地区画整理組合地区の区画整理が完了する【図1】。

1-3 露店とその主体

尾津喜之助は関東大震災直前に、1930年代には安田朝信、和田 薫、野原松次郎などのテキヤが新宿に進出し、庭場を築いているが、 彼らは主に縁日や祭礼に露店を出店していた。

第2章―闇市の発生とマーケット

2-1 都市組織の創傷 一建物疎開と焼け跡-

昭和20年1月の新宿を写した【図1】からわかるように、昭和19年新宿駅東側に1900坪の交通疎開空地がつくられた。そして、新宿は4月13日夜から14日の午後、5月24日の午後、さらに翌25日夜から26日の午後にかけての大空襲で劫火に包まれ、灰燼に帰す。新宿駅付近で焼け残った建物は17棟であった【図2】。

2-2 闇市の発生とマーケット

戦後闇市を生んだのは戦前からのテキヤ集団であった。終戦後 の真空状態の都市に、その文化が爆発的に露出する。

昭和20年の年末には、露店商同業組合の組織的な統制が強くなり、闇市の形態はヨシズの区画の中に屋台を持ち込むもの、柱を立ててヨシズの日よけをかけるもの、更にバラックを建て店舗の体裁を整えるものと、闇市の形態も徐々に発展していく。

闇市への取締りは断続的に行われるものの、テキヤの性質は保たれながら、昭和 21 年夏、都内の闇市は仮設的で移動可能な構築物から、土地に定着したマーケットへと脱皮していく。



図1:昭和20年1月の新宿

2-3 闇市時代末期の都市組織

新宿では終戦から昭和22年初旬までに、3つのマーケットが建設される。

(1) 新宿マーケット:中村屋から三越の西まで。戦前は主に木造三階建ての小売店が12軒並んでいた土地である。終戦後それらの建物の焼け跡を尾津組が整理し、ヨシズの日よけがあるだけのマーケット32コマを建設する。昭和20年末、16コマを焼失した事をきっかけに、木造屋根付きでペンキ塗装を施した建物へと建て替える。

(2) 和田組マーケット:武蔵野館西側から新宿駅南口。昭和21年10月、和田組によって建設・管理され、約400店が入っていた。(3)安田組マーケット:西口の線路沿いに。昭和21年の年末から、翌年の頭にかけて、青梅街道から西口改札前まで一気にマーケットが建設され、新宿西口には約300軒ほどのマーケットができあがった。

【図3】は昭和23年4月に新宿東口の二幸屋上から撮られた3枚の写真を合成したものであるが、焼け跡や更地になっていた場所にバラックが簇生し、稠密な都市組織を形成している。さらに、新宿通りにおいては戦前の町並みと比較しても、大局的にはほとんど遜色ないまでに、再生している。

【図3】で高野西に鉤の手状に並ぶバラックはハモニカ横丁で、昭和23年1月から4月の間に野原組によって建設された。昭和24年の火災保険特殊地図には固定式屋台33軒と記載されている。

もう一つ野原組によって組織されたマーケットが聚楽東から南にかけて広がっている。このマーケットは昭和22年9月8日から昭和23年4月の間に野原組によって建設された。

以上が新宿駅近傍における戦後復興期、昭和24年春頃までのマーケットの形成の全てであるが、もう一つこの時期新宿駅に隣接する土地で占有が問題となった場所がある。それは、新宿西口改札口の正面に位置する通称「中の島」と呼ばれた三角地帯である。昭和23年年に清田洋二という人物がここで小売店を始めようと新宿に小売店設置の許可を願い出たところ、区は道路占有許可権の範囲を誤認し、当時のRTO(連合軍鉄道輸送事務所)の許可を得た上で、昭和29年6月までの期限付きで土地の使用を許可を出す。しかし、この土地は道路ではなく国鉄の所有地で、区はその後許可を取り消し、立ち退きを通告したが、営業者は立ち退く事はなかった。

以上が1949年までの新宿駅近傍における、都市組織としてのマーケット形成である【図4】。



図2:焼け残った建物

第3章 一闇市の整理 3-1 露店整理

昭和24年当時、新宿の露店は西口の安田組マーケット周辺と、新宿通りに並んでいた。そのうち400軒が新宿商業共同組合を結成し、自己資金2,000万円と、約1億円の融資を受け、昭和26年12月12日新宿サービスセンターを開設する。新宿サービスセンターの敷地は、都電の車庫跡の都有地で、747.97坪を2,729

万円で購入している。共同仕入れ、共同販売の百貨店形式の経営で、組合員全員が経営者兼従業員であった。「昼夜デパート」として売り出すも、数年で経営は悪化し、昭和30年8月京都の丸物デパートに買収され、さらにその後、伊勢丹に買収される事になる。

3-2 区画整理を契機とする都市組織の動態

新宿駅東口のマーケットは、そのほとんどが戦災復興土地区画整理事業を契機とし、その空間を換地で変換されることによって、あるいは変換されることもなく整理されていく。新宿駅東口の区画整理は昭和23年6月3日に都市計画事業決定された15.26haの第9-2地区である。

本節で筆者が行った作業は、一筆ごとの従前の町丁名、地番、地目、地積と、従後の町丁名、街区番号、地番、地目、地積の情報が記載された換地詳細書をもとに、従前、従後二枚の換地完了図の間の土地の動きを復元し、火災保険特殊地図(昭和24、26、29、33年)、住宅地図(昭和37、43年)から観察できる各年代間の建物の変化と照応することである。ここでは、その一例を示す。一和田組マーケットの移転(事例1)一

復興土地区画整理事業において、新宿のマーケットに最初に手が加えられたのは昭和25年1月5日、和田組マーケットに対してである。和田組マーケットや野原組マーケットが占拠していた土地は戦前に交通疎開空地となっており、終戦直後は都有地であった。それが、そのまま都有地として駅前広場に変わったのではなく、昭和23年頃払い下げが行われ、区画整理においては宅地として、マーケットとは無関係に換地されている【図5】【表1】。

昭和25年1月5日及び同年3月31日、マーケットの建つ土地を駅前広場にするため、356軒の和田組マーケットは二つに分かれて移転することとなる。一つは、1月5日の和田組マーケットに隣接する共栄社跡地への暫定的な移転である【図6】【図7】。移転した184軒の営業者(新宿東口協同組合)は、同地に新築マーケットを建設して移転した。この土地は、区画整理で駅前広場になることが決定しており、広場の施工が始まるまでの暫定的な換地であったが、営業者は駅前という立地を手放すことなく移転前と同様な営業を続ける。

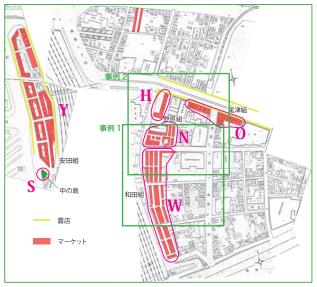
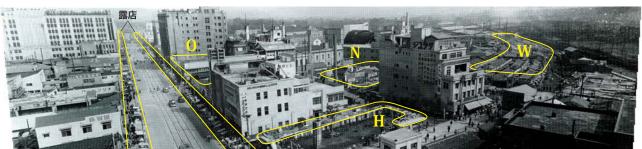
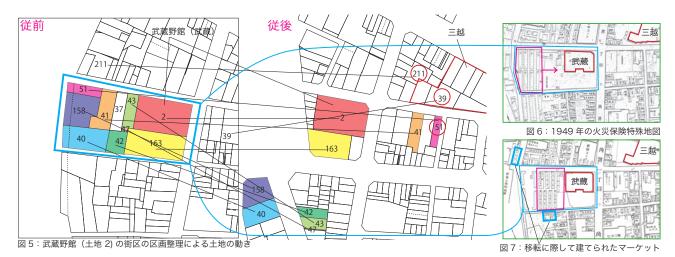


図4:昭和23年春頃までに建設された新宿のマーケット





	従前						
図中の番号	町丁名	地番	地目	地積 (m)			
2	角筈1丁目	101	宅地	1182,01			
37	角筈1丁目	1 0 4 3	宅地	273,71 (82,80坪)			
40	角筈1丁目	1046	宅地	625,58			
41	角筈1丁目	1047	宅地	383,90			
42	角筈1丁目	1 0 4 8	宅地	274,64			
43	角筈1丁目	1 0 4 9	宅地	256,85			
47	角筈1丁目	1 Ø 5 3	宅地	15,10			
51	角筈1丁目	1057	宅地	205,19			
153	角筈1丁目	10171	宅地	382,87(115,82坪)			
158	角筈1丁目	10176	宅地	622,38			

Γ	従後						
-	街区番号	町丁名	地番	地目	地積 (m)		記事
1	64	角筈1丁目	1108	宅地	1194,41		
							法90条により金銭清算法1 04条1項により消滅
1	68	角筈1丁目	14012	宅地	453,05		
1	66 – 1	角筈1丁目	7の16	宅地	279,14		
1	69	角筈1丁目	10013	宅地	191,07		
T	69	角筈1丁目	10の12	宅地	178,25		
T	69	角筈1丁目	10011	宅地	10,54		
-	66 – 1	角筈1丁目	7の18	宅地	148,59		
1	67	角筈1丁目	1017	宅地	303,53		
	68	角筈 1 丁目	14013	宅地	466,90		

表 1:図5に示した区画整理における換地情報

もう一つは、昭和25年3月31日の強制取り壊しである。この とき、マーケット側が居住者大会を開き強烈に反発したため一端 工事は中止され、同マーケット前にマーケットを仮設し、抗議す る営業者の一部を収容することとなる【図7】。最終的には、三光 町に換地を与えられ、172軒が集団移転する。このときできたマー ケットが現在のゴールデン街である。この換地は戦前、新宿市場 があった場所である。三光町には和田組マーケットの営業者と共 に、新宿二丁目付近の露店営業者も集団移転し、木造二階建てで、 四本の通りを挟んだマーケットを建設し入居する。どちらの営業 者も土地を持たなかったのにもかかわらず、換地を与えられ移転 することができた。しかし、和田組マーケットは駅前という立地、 新宿二丁目付近の露店は遊郭周辺という立地を活かして商売を 行っていたがゆえに、三光町に換地を与えられ、集団性を持って マーケットを開設することができたものの、依存できる対象を失っ たそれらの零細な商業者が、そのままの業態で利益を生むことは 困難であったため、非合法の風俗営業を行う青線地帯として発展 していく道をたどる。

【図 5】の範囲の区画整理は、昭和 33 年の新宿東口協同組合の立ち退きで完了に向かう。この範囲の区画整理は堅牢建物の武蔵野館を同地に残したまま換地設計が行われた。この中で、土地〈51〉は特徴的な動きをしている。この土地も疎開空地であったが、戦後三越に払い下げられ、三越の南向かいに換地される。そして、土地〈51〉と隣地にまたがって三越別館が建設される。同様に、三越は土地〈211〉、の土地〈39〉を引き寄せ、後に店舗の拡大を行っており、換地設計に三越の意図が反映されている事が分かる。一新宿駅東口駅前広場の区画整理(事例 2)一

昭和27年(1952)尾津喜之助は保釈されるとすぐに、尾津商事株式会社を立ち上げる。尾津は昭和23年に都有地の払い下げで土地〈272〉【図8】を取得し、保釈後この土地に龍宮マーケットを建設する。この土地の換地は、駅前(66.61㎡)と、三越南(367.76㎡)に決まっており、従前の土地は区画整理で駅前広場になる予定地であるため、建築物は許可されない。そこで、簡易店舗を計画し、総工費650万円で野原商事会社(元野原組)に請け負わせ、建設させた。この龍宮マーケットは昭和35年頃、広場の施工が行われるまで、ハモニカ横町とともに駅前に存続する。

中村屋は戦後、新宿通り側を尾津組の新宿マーケットに占拠され、接道できなかったため、南側に隣接するトトヤの敷地からア

クセスしていた。昭和22年の尾津の検挙後、徐々に新宿通り側の土地を取り戻す一方で、三越側に増築し出入り口を設ける(土地〈117〉)。土地〈117〉は、区画整理前は新宿松竹映画劇場付近の土地である。これは明らかに、先の三越の例と同じく、中村屋の力が換地設計に働いていると考えて良いだろう。

聚楽周辺の野原組のマーケットは昭和35年頃に聚楽(土地〈17〉、 (20)) の曳家工事のため整理される。このとき、換地はなかった。 【図8】の範囲の換地設計は、駅前広場をつくるため全体が大き く動く必要があったものの、高野所有の建物2軒(土地〈298〉、 〈299〉)、中村屋(土地〈295〉)、新宿ストア(土地〈8〉、〈233〉、 〈234〉)、聚楽(土地〈17〉、〈20〉)と堅牢建物が多く、さらに聚 楽周辺には接道していない土地が計6筆と、接道していない借地 2 筆があった。そのため、聚楽を曳家で動かし、その周辺の土地 を再構成する事で、駅前広場の空間をつくり出し、接道していな い土地も接道するように再構成された。土地〈98〉、〈46〉を金銭 精算によって消滅させ、土地〈6〉と〈273〉を新宿通りよりも北 の裏通りへ換地、土地〈196〉、〈197〉、〈198〉、〈199〉を武蔵野 館に西へ換地、土地〈7〉、〈272〉を分筆して換地、三越の土地で ある土地〈211〉は三越に隣接する場所へ換地、そして高野と中 村屋の南に幅員4メートルの道路を通す事で聚楽周辺の土地を接 道させた。

3-3 西口におけるマーケット整理

新宿西口駅前は戦前に区画整理が行われ、戦災復興土地区画整理事業において殆ど街区形態に変更がなかった事が背景となり、安田組が建設したマーケットは高度成長期まで飲屋街として賑わい存続した。安田組マーケットが建つ土地のうち、現在の思い出横丁の土地は安田組と、不動産会社三光土地、十二社に住む渡辺という地主が所有し、それよりも南の土地は、昭和19年に帝都高速度交通営団が都から譲り受けた土地と、東京都の土地であった。安田組マーケットは土地所有者と営業者の間に契約が結ばれず、不法占拠まま昭和30年代前半まで存続する事となる。

昭和31年、交通営団の敷地で営業していた安田組マーケットの店舗170軒余りに立ち退きが求められた。これに対して、同年11月、営業者は新宿西口協同組合を結成し、交通営団との交渉に当たり、立ち退く代わりに交通営団の敷地の一部、250坪を株式会社新宿西口会館が30年賃貸するという条件を獲得し、昭和38年にビルが竣工、マーケット営業者が入居した。



表2:図8に示した区画整理における換地情報

昭和36年、小田急電鉄は都に対して、西口駅前の都有地払い下 げを申請する。都は、不法占拠の立ち退きを小田急が処理する事 を条件に払い下げを行う事とする。小田急が新設する地下街にテ ナントとして優先的に入居させる事を条件に、立ち退き交渉が行 われたものの、交渉は進展せず、強制執行で整理される事となる。 昭和40年新宿西口広場が竣工し、同時に安田組マーケットの営業 者の一部が入居する小田急エースがオープンした。

結論

本研究を通じて、終戦後の闇市の発生とその整理過程を明らか にした。一見その過程は、とどまるものはなく、ほとんどの建物 が新陳代謝を繰り返し、かつ区画整理においては土地すらも再構 成していく、とらえどころのない都市に見えてしまう。しかし、 だからこそ一粒一粒の建物とその凝集構造、及び土地の動きを丁 寧に観察することが、新宿の性質を捉える事となった。

戦後の闇市の発生は、公権力の許可や要請を背景に、戦前から 仮設的な存在として、盛り場の一端を担ってきた露店商 (テキヤ) の文化が、終戦直後、真空状態の都市の表舞台に爆発的に露出し た瞬間であった。

しかし、その様相はもはや仮設とは言えないほどの影響力を持 ち、公権力の規制は浮動的で扱いにくいそれらの露店を土地へ定 着させる方向へと向かう。そして、本来テンポラリーであった露 店がマーケットとして都市組織に組み込まれていく。

1950年前後から始まる整理過程においても、多くが土地を所有 しないマーケットを、都市組織に組み込む事によって区画整理を 行っていった。さらに本来土地を持たず商売をするテキヤである 尾津喜之助が、土地を取得し都市形成に参加していったことは注 目すべき事である。新宿駅近傍における戦後復興期の形成過程は、 時間を使ってインフォーマルなものとフォーマルなものが綯い交 ぜになり都市組織が織り上げられていく過程であった。

本研究が対象とした時期は1970年までであったが、新宿はそ の後、西新宿の副都心化を背景として東西両側で更なる再開発が おき、都市組織は激しく変容する。だが、その過程は戦後復興期 における闇市の発生とその整理過程で生まれた都市組織を基盤に 変容していることは明らかである。

初田香成『戦後日本における都市再開発の形成と展開に関する史的研究』2008年度東京大学学位論文 /田中傑『帝都復興と生活空間 関東大震災後の市街地形成の論理』東京大学出版会、2006 年/松平誠 『ヤミ市―東京池袋』ドメス出版、1985 年/松平誠『ヤミ市幻のガイドブック』筑摩書房、1995 年/ ヤミ市調査団他『東京都江戸東京博物館調査報告書 第2集 常設展示制作に伴う調査報告2(大型模型 2) ヤミ市模型の調査と展示。東京都江戸東京博物館、1994年/尾津喜之助『新やくざ物語』早川書房、 1953年/金子正巳『やきとり屋行進曲 西新宿物語、文陽社、1983年/新宿西口会館社史編纂委員会『新 1903 + 7 ま] Li - でくこり面11 Juam に利用が向記 入端では、1903 + 7 利用は日本知由入場を終る。 宿岡口会館 設立 40 周年記念誌。 株式会社・西口会館、2000 年 / 小田急エース総務委員会 『小田急エース 25 年のあゆみ』小田急エース名店会、1992 年 / 河村茂 『新宿・街づくり物語―誕生から新都心まで ー』勝田三良監修、鹿島出版会、1999 /芳賀善次郎『新宿の今昔』紀伊国屋書店、1970 年 島富士夫、生方良雄『鉄道と街・新宿駅』大正出版株式会社、1989年/東京都建設局区画整理部計画課 『甦った東京 東京都戦災復興土地区画整理事業誌』東京都建設局区画整理部計画課、1987年/建設省『戦 災復興誌 第十巻 都市編Ⅶ』大空社、1994 年/東京都『東京都戦災誌』東京都、1953 年